

P-217 抗子宮頸部腺癌抗体1C5と抗 β -カゼイン抗体の免疫組織学的検討

札幌医大

小泉基生、鈴木孝浩、堀本江美、工藤隆一

【目的】子宮頸部腺癌は早期診断が困難であり、我々は抗子宮頸部腺癌抗体1C5を作製し、その有用性について発表してきた。さらに1C5認識抗原は β -カゼインと共通抗原を持つ事が判明した。そこで、 β -カゼインに対する抗体を作製しその反応性の差違について解析し、その臨床的有用性について検討した。

【方法】 β -カゼイン2mgをウサギに週1回計8回免疫後採血し、硫酸塩析後ヒト血清で吸収しその後の実験に用いた。これを希釈後一次抗体とし、ABC法を用いて定型的に免疫組織学的検索を行った。また、ウエスタンブロット法およびブロッキングアッセイにより、1C5と抗 β -カゼイン抗体との認識抗原決定基の差違について検討した。

【成績】抗 β -カゼインは、ウエスタンブロットで β -カゼインと反応したが子宮頸部腺癌細胞株の抽出物では異なるバンドが得られた。子宮頸部腺癌7例中6例、子宮頸部扁平上皮癌6例中4例、子宮内膜癌5例中4例に、正常内膜腺に反応性を示した。ブロッキングアッセイでは、それぞれの抗体反応性の低下傾向が認められた。

【結論】抗 β -カゼイン抗体は1C5とは異なる染色性を認め、1C5で完全に反応をブロックできないことから、1C5と共通抗原決定基を持つが、腫瘍組織には β -カゼインと共通する抗原性が存在し、新しいマーカーとなる可能性が示唆された。

P-218 子宮頸部腺癌の細胞診に関する検討

愛知県がんセンター病院 同臨床検査部*

岩田光正、前田修、井上武夫、越川卓*, 葛谷和夫

【目的】近年子宮頸癌における頸部腺癌の占める割合は増加傾向にありその予後は扁平上皮癌に比し悪いとされている。1964年～1992年に当科にて治療した214例の子宮頸部腺癌例を術後臨進行期別に5年生存率の比較検討をしたところ上皮内腺癌(AIS)+微小浸潤腺癌(MI)は96%,pT1bN0期は91%,pT1bN1期は57%,II期は34%,III期+IV期は33%であった。扁平上皮癌に比して頸部腺癌はリンパ節転移陽性例においてより予後が悪くなることより、頸部腺癌の初期病変の検出頻度を上げることが急務と考え、スクリーニングにおける細胞診上の問題点を検討したので報告する。

【方法】1986～1992年に当科にて治療した頸部腺癌42例を術後の病理組織診断にてAIS 6例,MI 8例,浸潤癌(INV)28例に分類した。それぞれの術前の子宮頸部細胞診標本を観察し、核クロマチン量,異型細胞集塊の細胞数,核の短軸と長軸の比,摘出標本腫瘍占拠範囲と細胞診所見の比較検討をした。

【成績】術前の細胞診の結果はAISはClassII 1例,Class III 4例,Class IV 1例,MIはClassIII 3例,ClassIV 1例,ClassV 4例,INVはClassIII 5例,Class IV 5例,ClassV 18例であった。INVはAIS,MIに比して核クロマチン量の増量をみた。集塊の細胞数の比較ではAISが平均 62.0 ± 40.5 個,MIは 108.0 ± 81.6 個,INVで 287.9 ± 400.1 個であった。核の短軸と長軸比の比較ではAISにその比がMI,INVと比較して小さい傾向をみた。(結論)子宮頸部腺癌はINVのなかにもClassIIIと評価される場合があり組織検査の重要性が示唆された。子宮頸部腺癌の診断には細胞採取法のみならず核クロマチン量,集塊の細胞数,核の短軸と長軸比が重要と思われた。